

## 夏目漱石の小説『門』にみる明治末期の中流家庭： 下女 のいる暮らし

著者	清水 美知子
雑誌名	研究紀要
号	16
ページ	61-73
発行年	2015-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1084/00000426/">http://id.nii.ac.jp/1084/00000426/</a>

# 夏目漱石の小説『門』にみる明治末期の中流家庭 — 〈下女〉のいる暮らし—

The middle-class household at the end of the Meiji Period as seen in  
Natsume Soseki's novel *The Gate: Life with a maidservant*

清 水 美知子\*  
Michiko SHIMIZU

## Abstract

This paper examines the home life of an urban middle-class household at the end of the Meiji Period as seen in Natsume Soseki's full-length novel *The Gate* (1910). The character Sosuke, who resides in a three-person household with his wife and a *gejo* (maidservant) in a humble rented house nearly 20 minutes on foot from the final station of a rail line, lives in straitened circumstances. Despite his gloomy thoughts on a rainy day with a hole in the sole of his shoe, he cannot afford to buy new shoes.

But why does this household, which is not particularly wealthy, have a live-in maidservant? This was because housework in a middle-class household at the end of the Meiji Period took so much time and effort that a full-time housewife could not complete the task herself. Gas lamps were the source of light, and meals were cooked using a *shichirin*, a small charcoal stove of clay or earthenware. The novel *The Gate* answers our question persuasively by depicting household articles and the living space in detail.

キーワード：中流家庭, 下女, 夏目漱石, 小説, 『門』

## I 夏目漱石の小説と下女

夏目漱石の小説には、〈下女〉と呼ばれる住み込みの家事使用人がひんぱんに登場する。下女は元来、勝手向きの雑用を担う〈下女中<sup>しも</sup>〉をさす言葉であった。それが明治以降、家事使用人の雇用が中流家庭に広まるにつれ、奥向きの家事を担う〈上女中<sup>かみ</sup>〉との区別が曖昧になった。

漱石が活躍した明治30年代後半から大正にかけては、日露戦争後の都市の膨張を背景に、官公吏、教員、会社員などの俸給生活者（サラリーマン）が増え、新しい中流階級（新中間層）を形

---

\* 関西国際大学人間科学部

成した時代である。新中間層の家庭は、家事使用人を置くといってもせいぜい一人か二人にすぎず、奥向き／勝手向きというように仕事の種類や内容を定めることがむずかしかった。家事使用人の多くが台所まわりの雑用など下女中の仕事を担当したことから、明治半ばには、〈下女〉が女性家事使用人の代名詞となった<sup>注1</sup>。

新中間層の家庭は、①子ども数が少なく親と同居しない核家族が多い。②夫は俸給生活者として家の外で働き、妻は家事・育児に専念するという性別役割分業型のライフスタイルをとる。③特に裕福ではないが比較的安定した生活を営む。④夫のみならず妻も中等以上の教育を受けた者が多い、という特徴を持つ。ひるがえって、漱石の小説に登場する家庭には三つの特徴がある。第一に、主要な登場人物（男性）の大半が高等教育を受けた俸給生活者であり、しかも官吏や会社員や中等学校教師、大学教師といったホワイトカラーが多い<sup>注2</sup>。いっぽう女性は、既婚者はほぼすべてが主婦である。第二に、主要登場人物の家庭の多くが、夫婦のみか夫婦と子どもからなる“核家族”であり、子どもの数は少ない。第三に、主要登場人物の多くが旧江戸市街地の範囲内かその隣接地域、“山の手”もしくはその周縁に住んでいる<sup>注3</sup>。すなわち、漱石が好んで描いたのは、山の手に暮らす新中間層の物語だったのである。

南博の推計によれば、1920（大正9）年の新中間層は全人口の5～8%程度存在した。大正初年から比較すると、全人口の3%程度は新中間層の増加になった。都市にかぎっては、さらに大きな比率と増加があったと考えられる。たとえば、東京市の職員の全就業者に占める比率は、1908（明治41）年には5.6%であった。それが1920（大正9）年には21.4%にのぼったという<sup>1)</sup>。

夏目漱石がデビュー作『吾輩は猫である』を発表したのは日露戦争中の1905（明治38）年。「朝日新聞」を舞台に専業作家としてスタートしたのは1907（明治40）年。そして1916（大正5）年12月、漱石は『明暗』連載中に胃潰瘍が原因とみられる脳出血により亡くなった。漱石が小説家として活躍した10余年は、都市部で新中間層が急激に増大した時代と重なる。

筆者はこの数年、家事使用人が登場する小説を通して、日本の家庭や家族、そして社会について考える研究を行っている。加藤秀俊が指摘するように、「文学というものは、しばしば、社会科学よりもしっかり同時代をつかまえる力を持っている。社会科学というものが、それぞれの方法論や理論でみずからをぎりぎりと緊縛してしまっているのにたいして、文学は、自由な想像力を駆使して、時代と社会を生き生きとえがきだしてくれる<sup>2)</sup>」。文学に描かれた世界は、事実ではない。しかし、フィクションであるがゆえに文学作品は、“社会をうつしだす鏡”として眞実を伝える力を持つ。なぜなら、小説もまた社会状況の産物にすぎず、それを生みだした社会と切り離して考えられないからである。

本稿では、漱石の小説『門』（1910年）をテキストとして取り上げる。小説に描かれた表象の分析を通して、明治末期の中流家庭、特に新中間層の家庭生活について明らかにしたい。

## II 小説『門』について

### 1. 作品の背景

『門』は1910（明治43）年3月1日から同年6月12日まで、『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』の両方に104回にわたって連載された長編小説である。単行本は、1911（明治44）年1月に春陽堂より刊行された。この作品は、『三四郎』（1908年）、『それから』（1909年）とともに“三部

作”をなす。

『門』というタイトルには、興味深いエピソードがある。新たな連載を始めるにあたり、漱石は小説のタイトルに悩んでいた。いよいよ新聞に予告を出す日の朝になって、漱石から頼まれた弟子の森田草平と小宮豊隆がその場にあったニーチェの『ツァラトゥストラ』の翻訳本を取り上げ、おみくじでも引くように開けてたまたま出てきたのが「門」という言葉であった。漱石ほどの作家ならこれを題にして何か書けるだろうと二人の意見は一致した。漱石に連絡しないまま「門」をタイトルとして朝日新聞社に届けたため、漱石が自分の作品のタイトルを知ったのは、一般の読者と同じ翌日の紙上だったという。連載を開始した漱石は、ドイツ留学中の弟子・寺田寅彦に宛てて「又小説をかき出した。三月一日から東京大阪両方へ出る。題は門といふので、森田と小宮が好加減につけてくれたが一向門らしくなくて困ってゐる<sup>3)</sup>」と書き送っている。他の多くの作品に比べると、構想にかかる時間も短かったようである。

前作『それから』脱稿後、漱石は旧友で当時満鉄総裁だった中村是公に誘われて、満州・韓国へ旅行に出かけた。1カ月半に及ぶ大旅行だったが、旅の途中でも持病の胃痛に苦しめられ、帰国後も十分な快復をみないまま『門』の執筆に取りかかった。弟子の鈴木三重吉に宛てた手紙の中で漱石は、「小生は胃の加減わるく気に任せて長く筆を執ると疲労する故大抵毎日一回位で胡魔化し居り候<sup>4)</sup>」と書いている。そして、『門』を書き上げた6月6日に病院へ行って診察を受けたところ、胃潰瘍の病状が悪化しており同月18日に入院。やがて漱石は、療養先の伊豆で生死の境をさまよう「修善寺の大患」を経験することになる。

## 2. 作品のあらすじ

このような経緯のなかで書き上げられた『門』は、社会の掟に背いて結婚した二人がその後どのように生きたかを取り上げた話である。主人公の野中宗助は学生時代、親友・安井と内縁関係にあった御米を奪い結婚した過去を持つ。道義的な問題から大学を辞めざるをえなかった宗助は、実家や親類ともほとんど付き合いを持たないまま、夫婦でひっそりと暮らしていた。

宗助は丸の内の役所に通う勤勉な官吏である。勤務時間は朝8時から夕方4時まで<sup>注4</sup>。年齢は明示されていないが、30歳前後と思われる。大学中退の下級官吏の暮らしは苦しく、靴底に穴があき雨の日には鬱陶しい思いをしながらも、新調することもままならない。

もっとも、宗助の出自は決して悪くはない。実家はかつて「抱車夫を邸内の長屋に住まはせて」いたほど裕福だった。学生時代は「相当な資産のある東京ものの子弟として」何不自由ない生活を送っていた。それが御米と結婚したために、社会からはじき飛ばされるように広島、福岡へと渡り、友人のついでで東京に職を得て、今は市電の終点駅から徒歩で20分近くかかる借家で、妻・御米と下女・清との三人で暮らしている。

宗助夫婦は一度のみならず、三度も子どもを亡くしている。最初は流産、二人目は早産、三人目死産。妻の御米は易者から「罪が祟ってゐるから、子どもは決して育たない」と言われ、このことが彼女の心に重くのしかかっている。宗助も、現在の家庭は自らの「我執」「エゴイズム」の上に築かれたものであるとの意識から、安息を見いだせないでいる。

すでに母の亡かった宗助は、広島にいる頃、父を亡くした。父の死の後始末で東京に返った宗助は、父の財産が予想に反して少なかったことを知る。そればかりか父は借金も抱えていた。叔父・佐伯と相談の上、父が困っていた妻には相当の金を出して暇を出し、家屋敷は売却すること

にした。また、父が収集していた書画骨董品も処分することとした。宗助は、借金の後始末と遺産の整理、保管すべてを叔父に任せ、弟・小六は叔父の家に厄介になることで話をつけた。そして、小六の学資として叔父には1000円を預けた<sup>注5</sup>。

宗助はこれで一応の責任を果たしたつもりでいた。ところが、叔父が急死し、その妻である叔母からは、学資として預けた1000円はすでになく、残された資産も叔父の事業で失われたことを知らされる。亡父から受け継いだ邸宅を売り払ったとき、借財を返したあとに残った金は4000円以上あった。しかし、その遺産は、宗助が叔父に託したものだから、叔父自身の所得として見なしてかまわない。だが、不当に儲けたと言われては不快だから、遺産は小六の名義にしてやる。世間に顔向けできないことをして廃嫡されかかった宗助には一文だって取る権利はない、というのが叔父の言い分だった。

宗助が継ぐべき遺産は、叔父の横領によりすべて失われてしまった。手元に残ったのはただ一つ、「抱一の落款つきの屏風」だけであった。叔母は、息子・安之助の結婚問題などで出費がかさむので、小六への学費は打ち切ると宣言。困り果てた小六は、久方ぶりに兄・宗助の家を訪ねる。宗助夫婦は、やむなく高校生となった小六を引き取る。だが、宗助には民法上の義務があるにもかかわらず、弟に高校大学を卒業させるだけの経済的余裕がない。宗助夫婦は、たった一つの遺産である「屏風」も売り払ってしまう。

そんな折、泥棒事件をきっかけに、宗助は家主の坂井と親しくつきあうようになる。いっぽう御米は、義弟・小六に対する心労が重なり床についてしまう。ようやく御米が小康を得た頃、宗助は坂井からかつての親友・安井の消息を知らされる。安井は大学を退学して大陸へ渡り、同じく「冒険者」として活動する坂井の弟とともに一時帰国して、坂井家を訪ねて来るというのだ。安井のことを御米に話すどころか、御米に顔を合わせる度胸もない宗助は、ひとり不安にさいなまれながら鎌倉への参禅に打開の道を探ろうとする。が、結局は不安からの脱却を得られないまま帰京する。

家に戻った宗助は、坂井から安井が満州へ帰還したと聞いて安堵する。また、弟・小六の学資問題も、小六が坂井家の書生として住み込み、不足分を宗助と亡叔父の息子である安之助が出し合うことで決着がつく。しかし、その安堵は絶対の保証ではない。宗助はこれからも不安を抱えつつ生きて行くのだろう。それは、「本当に有難いわね。漸くの事春になって」と喜ぶ御米に対して、宗助がかけた「うん、然し又おちき冬になるよ」という言葉に表れている。

「自分は門を開けて貰ひに来た。けれども門番は扉の向側にて、敲いても遂に顔さへ出して呉れなかった。ただ／『敲いても駄目だ。独りで開けて入れ』と云ふ声が聞こえた丈であった<sup>5)</sup>」  
「彼は門を通る人ではなかった。又門を通らないで済む人でもなかった。要するに 彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であった<sup>6)</sup>」という参禅のくだりは、作品中、最も印象的なフレーズであろう。漱石は、弟子のつけた「門」というタイトルに平仄を合わせ、見事におさまりをつけたのである。

### Ⅲ 『門』に描かれた中流家庭

#### 1. 家の造作と間取り

夏目漱石は、第一高等中学在学中に建築科への進学を志したことがある。1906（明治36）年に発行された雑誌『中学文芸』のインタビュー記事の中で、漱石はその理由について次のように語っている。

「僕は元来変人だから此儘では世の中へ容れられない、世の中へ立ってやって行くには何うしても根底から之を改めなければならぬが、職業を択んで日常欠く可からざる必要な仕事をすれば、強いて変人を改めずにやって行くことが出来る。此方が変人でも是非やって貰はなければならぬ仕事さへして居れば、自然と人が頭を下げて頼みに来るに違ひない。然うすれば飯の喰外れはないから安心だと云ふのが、建築科を択んだ一つの理由。それと元来僕は美術的なことが好であるから、実用と共に建築を美術的に見ようと思ったのがもう一つの理由であった<sup>7)</sup>」。しかし、同級の友人で懇意にしていた米山保三郎から、「君は建築をやると云ふが、今の日本の有様では君の思つて居る様な美術的の建築をして後代に遺すなどと云ふことは、とても不可能な話だ。それよりも文学をやれ、文学ならば勉強しだいで幾百年、幾千年後に伝えるべき大作ができるじゃないか<sup>8)</sup>」と言われ、結局、大学では英文学を専攻することにした<sup>注4</sup>。

#### 1.1 山の手の奥にある崖下の家

漱石の家を見る眼は、建築家のそれに近い。造作や間取りの簡潔かつ正確な描写は、作品の随所に見出すことできる。小説『門』における主人公宗助の家も、登場人物の行為や心理を描くためによく考えられた設計がされている。その一部を引用しておこう。

電車の終点から歩くと二十分近くも掛かる山の手の奥丈あって、まだ宵の口だけれども、隣は存外静かである<sup>9)</sup>。<sup>注6</sup>（傍点引用者）

宗助は、神田駿河台で外濠線に乗り換えた上で、勤め先の丸の内に向かう。前田愛は、通勤経路を考えると宗助が住む「山の手の奥」とは、江戸川橋の終点から徒歩20分の距離に入る早稲田界限だと推定している。<sup>10)</sup> 1907（明治40）年秋から早稲田南町に住むことになった漱石も、この江戸川橋－飯田橋－九段下経由の路線をひんぱんに利用していたという。

魚勝と云ふ肴屋の前を通り越して、其五六軒先の露次とも横丁とも付かない所を曲ると、行き当たりが高い崖で、其左右に四五軒同じ横の貸家が並んでゐる。つい此間迄は疎らな杉垣の奥に、御家人でも住み古したと思はれる、物寂た家も一つの地所のうちに混ってゐたが、崖の上の坂井といふ人が此所を買ってから、忽ち萱葺きを壊して、杉垣を引き抜いて、今の様な新しい普請に建て易へて仕舞つた。宗助の家は横丁を突き当たって、一番奥の左側で、すぐの崖下だから、多少陰気ではあるが、其代り通りからは尤も隔たつてゐる丈に、まあ幾分か閑静だらうと云ふので、細君と相談の上、とくに其所を択んだのである（傍点引用者、以下同じ）<sup>11)</sup>。

明治時代、東京の山の手に開かれた住宅地は、幕臣の屋敷跡地を再分割して作られる場合が多

かった。宗助の住む家の界隈は山の手の周縁ではあるが、もとは武家地であったことを示している。

## 1.2 茶の間を中心とした家

宗助の家の間取りについても見ておこう。「茶の間の襖を開けると、すぐ座敷である。南が玄関で塞がれてるので、突き当りの障子が、日向から急に這入って来た眸には、うそ寒く映った。其所を開けると、廂に逼る様な勾配の崖が、縁鼻から聳えてるので、朝の内は当って然るべき筈の日も容易に影を落さない。崖には草が生えてゐる<sup>12)</sup>」。

夫婦の坐ってゐる茶の間の次が台所で、台所の右に下女部屋、左に六畳が一間ある。下女を入れて三人の小人数だから、此六畳には余り必要を感じない御米は、東向きの窓側に何時も自分の鏡台を置いた。宗助も朝起きて顔を洗って、飯を済ますと、此所へ来て着物を脱ぎ更えた<sup>13)</sup>。

間取りの描写を平面図に起こすと図1のようになる。宗助の家は茶の間を中心として、東側には夫婦の寝室ともなる床の間つきの座敷がある。「座敷」とは客を通すからそう呼んでいるだけで、実際は書斎(宗助の居間)として使われている。家の西側には台所をはさむようにして、「下女部屋」と御米専用の居間(主婦室)がある。鏡台を置いた御米の居間は、時には繕い物等をやる家事室にもなる。下級官吏とはいえ、下女をひとり置くことのできる生活のゆとりが、妻専用の個室を可能にしているのだらう<sup>注7)</sup>。台所に隣接する下女部屋は三畳の広さ。室内には押し入れがあるだけである。

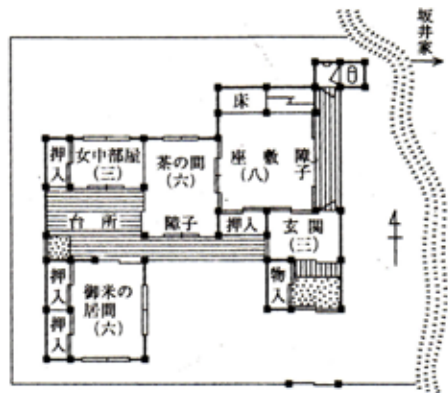


図1 宗助の家の間取り  
出所：前田愛『山の手の奥』前田愛著作集5より

中流住宅の特徴は、その規模にかかわらず、接客部分+生活部分+付帯部分を敷地の中に押し込めている点にある。宗助の家はコンパクトな作りだが、玄関から東西に伸びる廊下が設けられ、下女部屋もあることから、戦前の典型的な中流住宅<sup>注8)</sup>を意識して設計されたと思われる。

宗助の家には、座敷の東と茶の間の南手に縁側がある。宗助と御米はここで空を眺め入ったり、往来を行き交う人びとの下駄の響きを聴いたり、涼しい風を取り入れたりして、しばし寛いだ。

しかし、この家は風雨が強い日になると、トタン葺きの屋根から雨漏りがした。「御米は金盥の中に雑巾を浸けて、六畳の鏡台の傍に於いてゐた。其の上の所丈天井の色が変わって、時々雫が落ちてきた。／『靴ばかりぢゃない。家の中迄濡れるんだね』と云って宗助は苦笑した<sup>14)</sup>」。

崖下の家でひっそり暮らす宗助夫婦の生活は、宗助の弟・小六の同居により軋み始める。たとえば、それは同居して数日後、御米は小六に障子の張り替えを手伝ってもらう場面からもうかがえる。

「時々寒い風が来て、後ろから小六の坊主頭と襟の辺を襲った。其度に彼は吹き曝しの縁から六畳の中に引っこみたくなった。彼は赤い手を無言の儘働かしながら、馬尻の中で雑巾を絞って障子の棧を吹き出した<sup>15)</sup>」。御米は、障子張りを一緒に行うことで、義弟との距離を近づけようと

したのかもしれない。小六が兄夫婦の結婚について快く思っていないと、御米は疑っていたからである。しかし、それは逆効果だった。「小六は実際こんな用をするのを、内心では大いに軽蔑してゐた。ことに昨今自分が己むなく置かれた境遇からして、此際多少自己を侮辱してゐるかの観を抱いて雑巾を手にしてゐた<sup>16)</sup>」のである。

六畳の居間を小六に譲り渡した御米は、一人になれる居場所を失った。そればかりか、雨の日には夫の濡れたズボンや靴下をかわかしたり、着物を温めたりするたびに、炬燵を座敷に移動させなければならなかった。「座敷の真中にそんなものを据ゑて、今日は何うしたんだい」という宗助の問いに、「だって六畳の方は小六さんが居て、塞がってゐるんですもの」と御米は答える。そう言われて初めて宗助は、自分の家に小六の居ることに気が付く<sup>17)</sup>。御米との平穏な生活に割り込んでくる小六の存在について、宗助は御米ほど深く考えていなかったのである。

## 2. 生活財と生活空間

### 2.1 洋燈（ランプ）をめぐって

漱石の作品には、それぞれの部屋のしつらえや細々とした生活財についても、精緻に描かれている。ここでは、小六が数年ぶりに宗助の家を訪れた1909（明治42）年10月のある日曜日の夕方の情景について、その一部を引用しておこう。

「小六が来たから、何かご馳走でもするが好い」と云い付けた。細君は、忙しさうに台所の障子を開け放した儘出て来て、座敷の入口に立ってゐたが、此分かりきった注意を聞くや否や、「ええ今直」と云ったなり、引き返すとしたが、又戻って来て、「其代り小六さん、憚り様。座敷の戸を閉めて、洋燈を点けて頂戴。今私も清も手が離せない所だから」と依頼んだ。小六は簡単に、「はあ」と云って立ち上がった。勝手では清が物を刻む音がする。湯か水をざあと流しへ空ける音がする。「奥様是は何方へ移します」と云ふ声がする。「姉さん、ランプの芯を切る鋏はどこにあるんですか」と云ふ小六の声がする。しゅうと湯が沸って七輪の火へ懸った様子ある。宗助は暗い座敷の中で黙然と手焙へ手を翳してゐた。灰の上に出た火の塊まり丈色づいて赤く見えた。<sup>18)</sup>

東京では明治30年代後半から電気が普及し、1912（明治45）年には東京市内ほぼ全域で電灯の使用が可能になった。もっとも、借家暮らしが多い東京では、生活設備については家主の都合による部分が大きく、使用可能でも実際に使っているとは限らない。宗助の家には電灯はなく、照明は「洋燈（ランプ）」である。また、宗助の家にはガスも引かれておらず、煮炊きには「七輪」を使用し、「手焙」（小型の火鉢）で暖を取った<sup>注9</sup>。『門』の中では、引き出しのついた長方形の「長火鉢」、木をくりぬき内側に金属板を張った「火桶」、置炬燵などの生活財もしっかり描きこまれている。

漱石の小説における主人公の家庭で電灯が使われるのは、『行人』（1912年）以降である。『行人』や『心』（1913年）では「洋燈」と「電燈」が併用されているが、遺作『明暗』（1916年）においては「洋燈」の用例は見られない。大正に入ると中流家庭において電灯が急速に普及し、洋燈に取って代わったことがうかがえる。

『門』における「洋燈」は、照明器具として明かりを提供するだけでなく、人間関係を暗示す



る役割も果たしている。たとえば、「夫婦は例の通り洋燈の下に寄った。広い世の中で、自分達の坐ってゐる所丈が明るく思はれた。さうして此明るい灯影に、宗助は御米を、御米は宗助丈を意識して、洋燈の力の届かない暗い社会は忘れてゐた。<sup>19)</sup>」では、宗助と御米との距離は「洋燈」をはさんで限りなく近い、良好な関係として描かれる。いっぽう、「御米の宗助に打ち明けないで、今迄過ぎたといふのは、易者の判断であった。宗助は床の間に乗せた細い洋燈の灯が、夜の中に沈んで行きさうな静かな晩に、始めて御米の口から其の話を聞いたとき、流石に好い気はしなかった<sup>20)</sup>」の用例では、洋燈の灯が不吉なもの象徴として描かれている。「洋燈」は吊りランプ、置きランプ、台ランプがあるが、引用文に登場するのは竹筒の台がついているスタンド風のランプ（図2）であろう。



図2 台ランプの例  
出所：『漱石全集』第6巻，657頁

## 2.2 食卓（ちゃぶ台）をめぐる

この作品でもひとつ注目すべき生活財は、「ちゃぶ台」である。宗助の家には、近所の道具屋で買った「食卓」がある。『門』にはこの「食卓」を囲んでの食事の場面がくり返し取り上げられている。紙幅の都合によりここでは、3カ所に限って紹介しておこう。

小六が数年ぶりで宗助の家を訪れた日、ふたりは一緒に銭湯に行った後で夕飯の食卓につく。「宗助と小六が手拭を下げて、風呂から帰って来た時は、座敷の真中に真四角な食卓を据ゑて、御米の手料理が手際よく其上に並べてあった。…（中略）…兄弟は寛いで膳に就いた。御米も遠慮無く食卓についた<sup>21)</sup>」。引用文では「真四角な食卓」とあるだけで「ちゃぶ台」とは記されていない。目を引くのは、御米も「遠慮無く」食卓についたという表現で、ここから宗助と御米が仲の良い夫婦であることがわかる。

小六が障子の張り替えを手伝った日、御米は小六と差し向かいで昼食をとる。「小六が引き移ってから此四五日、御米は宗助のゐない午飯を、何時も小六と差向で食べるようになった。宗助と一所になつて以来、御米の毎日膳を共にしたものは、夫より外になかった。夫の留守の時は、ただ独り箸を執るのが多年の習慣であった。…（中略）…御米は小六と差向に膳に着くときの此氣ぶつせいな心持が、何時になったら消えるだらうと、心の中で私に疑った<sup>22)</sup>」。食卓ではなく「膳」という語が使われているが、二人が「食卓」に差し向かいで食事していることは明らかである。

同居の気苦労から御米は床についてしまう。御米は小六のために起きて一緒に食事をする気力はなかった。「小六は六畳から出来て、一寸襖を開けて、御米の姿を覗き込んだが、御米が半ば床の間の方を向いて、眼を塞いでゐたので、寝付いたとでも思ったものか、一言の口も利かずに、又そっと襖を閉めた。さうして、たった一人で大きな食卓を専領して、始めからさらさらと茶漬けを掻き込む音をさせた<sup>23)</sup>」。ひとり寂しく茶漬けを掻き込む小六にとって、小さな「食卓」が大きく感じられたのであろう。

都市に暮らす小家族の習慣として「ちゃぶ台」の使用が始まるのは、明治30年代から40年代のことである。それまでは、箱膳、銘々膳で食事するのが普通だった。箱膳・銘々膳からちゃぶ

台への移行は、一般には、封建的な序列を重んじる家族から民主的で平等なイメージの家庭への変化と捉えられる。食卓を囲むという行為は、一家団らの象徴でもあった。しかし、『門』においては、宗助と御米のささやかな幸せの象徴である「食卓」が、夫婦関係の不調や日常生活の破綻を表わす小道具としても使われている。

ところで、この作品では〈下女〉の清と一緒に食卓につく場面は見られない。宗助たちの食事中、清は食器を下げたり湯茶の用意するなど、指示があればすぐに動けるよう台所に控えていた。そして、「下女部屋を覗くと、清が自分の前に小さな膳を控えたなり、御櫃に寄りかかって突伏してゐた<sup>24)</sup>」という一文に示されるとおり、食事は下女部屋において一人でとった。下女はあくまで使用人。明治末期には身分意識が色濃く残っていたのである。

### 3. 中流上層家庭の生活

『門』においては、借家の家主である坂井の家庭生活についても描かれている。物語が始まる時点では、下女・清に家賃を持たせてやる以外に、宗助夫婦と坂井家のつきあいはなかった。家主の家から娘たちがピアノ<sup>注10</sup>を弾く音が聞こえても、別段何とも思わなかった。「崖の上に西洋人が住んでゐると同様に、隣人としての親しみは、丸で存在してゐなかつた<sup>25)</sup>」からである。それが坂井家から盗まれた「文庫」（書類を入れる箱）を宗助が拾ったことをきっかけに、宗助は坂井家を訪問する。

摺硝子の戸が閉てある玄関へ来て、ベルを二三度押して見たが、ベルが利かないと見えて誰も出て来なかった。宗助は仕方なしに勝手口へ廻った。其所にも摺硝子の嵌まった腰障子が二枚閉ててあった。中には器物を取り扱ふ音がした。宗助は戸を開けて、瓦斯七輪を置いた板の間にしゃがんでゐる下女に挨拶をした。／「是は此方のでせう。今朝私の家に落ちてゐましたから持って来ました」と云ひながら、文庫を出した。／下女は左様で御座いましたか、どうも、と簡単に礼を述べて、文庫を持った儘、板の間の仕切り迄行って、仲働らしい女を呼び出した。其所で小声に説明をして、品物を渡すと、仲働はそれを受取ったなり、一寸宗助の方を見たがすぐ奥へ入った<sup>25)</sup>。

複数の家事使用人を雇う坂井家では、宗助の家とは異なり、台所周りの仕事は「下女」、来客の取次など座敷方の仕事は「仲働」と、職務の分担が明確に定められていた。また、「瓦斯七輪」という語が示すように、坂井家にはすでにガスが引かれている。当時、東京市内でガスを契約していた個数は4万戸にも満たなかったから、宗助にとって瓦斯七輪（図3）は初めて見る設備であったにちがいない。

坂井は旧幕臣の出で、祖母はその昔、御殿奉公の経験を持つという門閥家である。維新後、坂井は社会の変化をたくみに乗り切り、市電の開通が住宅の需要を促すという見通しから、界隈の地所を買い取って借家を建てた。宗助が借りているのはその一軒である。主人の坂井は大学を卒業しているが、

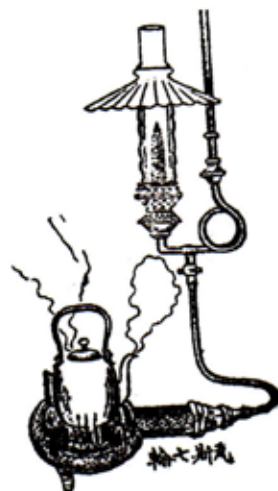


図3 瓦斯七輪  
出所：『漱石全集』第6巻，661頁

特定の職業には就いていない。資産家ゆえ、あくせく働く必要はないからだ。「妙な物淋しさ」を抱える宗助は、気さくで社交的な坂井の人柄に好感を持つ。そして、宗助が道具屋に売った遺産の屏風を坂井が買ったことがわかり、二人は親しくつきあうようになる。

「彼方へ行きませう」と云って、茶の間を通り越して、廊下伝ひに小さな書齋へ入った。其所は 宗呂の筆で書いた様な、大きな硬い字が五字ばかり床の間に懸かってゐた。棚の上に見事な白い 牡丹が活けてあつた。その外机でも蒲団でも悉く綺麗であつた。坂井は始め暗い入り口に立って、「さあ何うぞ」と云ひながら、何所かぴちりと捻って、電気燈を点けた。それから、「一寸待ち給へ」と云って、燐寸で瓦斯暖炉を焚いた。瓦斯暖炉は室に比例した極小さいものであつた<sup>26)</sup>。

坂井の家には、電気・ガス・水道のライフラインが完備しており、「電気燈」「瓦斯暖炉」など宗助には手が出ない便利な生活財もある。坂井家をたびたび訪ねることになった宗助は、その家庭が山の手の中流上層家庭にふさわしいライフスタイルを持っていることを知る。子だくさんの坂井家は、明るく華やかな雰囲気があり、子のない宗助の家とは大違いである。崖上の坂井家と崖下の宗助の暮らしぶりの違い、すなわち、中流上層に位置づけられる坂井家と中流でも下層の部類に入る宗助の家の生活の差異が、こうしたディティールを積み重ねることで、しっかりと描き込まれている。

坂井家の裕福な暮らしぶりを賑やかな家庭に触れて、宗助は幼い頃のゆったりとした生活を思い出す。そして、「自分がもし順当に発展して来たら、こんな人物になりはしなかったらうか」等と、あり得たかもしれない自分の姿を想像してみるものであつた。

#### IV むすびにかえて

『門』の主人公・野中宗助は、わずかな月給でやっと自身と妻を支える大学中退の下級官吏である。彼はあらゆる点で消極的で地味な人間で、むしろ余りに平凡すぎて記憶に残らないような人物と言える。いっぽう妻の御米は機敏であり落ち着いた雰囲気の女性だが、これといった特徴は持っていない。彼らは郊外のみすぼらしい借家に住み、新しい靴を買う余裕もない。しかし、一応安定した収入があり飢える心配はないのだから、この程度の貧しさは多くの人びとが経験することかもしれない。政治や経済など世間を動かす大きな問題は、宗助夫婦には無縁である。それらは帰宅後の夫婦の会話のネタとしてのみ使われる。そして、大きな事件も起きず、ごくありきたりの夫婦の日常を写實的に描いたところにこそ、この小説の魅力がある。

建築に造詣の深い漱石は、家の造作や間取り、生活財についても人物を描くのと同じくらいの情熱をもって描いた<sup>注11</sup>。たとえば、この作品では食事のシーンがくり返し描かれているが、ありきたりの日常生活を示しながら、漱石は「ちゃぶ台」という生活財を使って、宗助と御米の関係、御米と小六の関係などをリアルに表現している。また、家主の坂井の家を描くことにより、宗助の家との差異（対比）を浮き彫りにした。家庭内のモノ・ヒト・コトが、読者の視覚を満足させるように書かれているのである。

当時の中流家庭ではさして裕福でなくても下女を置いていた。それは、宗助のような中流下層

が住む借家にも、下女部屋が設けられていたことからもうかがえる。しかし、現代を生きる読者にとってはいまひとつ納得できないのではなからうか。靴を新調できないような家庭に、いったいなぜ下女がいるのか——。それは、電気もガスも引かれていない家庭において、家事は主婦ひとりではとてもこなさきれないほど、手間と時間のかかるものだったからだ。『門』という小説は、生活財や生活空間のディテールを詳しく描くことにより、その疑問に説得力をもって答えしてくれる。

くわえて、女性が現金収入を得られる仕事は限られていた。そのため、小遣い程度の給金で下女として働く女性はいくらでもいた。東京商業会議所の調査によれば、『門』が発表された1910(明治43)年、東京市の下女の平均月給は賄い付きで3円37銭<sup>27)</sup>。つまり、下女の供給が潤沢であり、給金も比較的安かったことから、宗助のような中流下層の家庭でもなんとか下女を雇えたのである<sup>注12)</sup>。

### 【注】

- 注1 文学作品をみても、明治期には〈下女(げじょ)〉〈下女(おんな)〉、〈下婢(かひ)〉〈下婢(はした)〉が多い。家事雑用に働く女性家事使用人にひろく〈女中〉という言葉を充てるようになったのは、大正期以降のことである。
- 注2 『坑夫』を例外として、漱石作品の主人公はほとんどが大学教育を受けている。職業については俸給生活者が多いが、中には『心』の「先生」や『それから』の主人公長井代介のように、高等教育を受けながら経済的に不自由がないため定職を持たない“高等遊民”もいる。
- 注3 明治時代の山の手は、小石川区の人口増加が著しく、牛込区がそれに次いだ。小石川区では1883(明治16)年から明治末年までの約30年間で人口は4倍に増加した。いっぽう、旧市域を取り囲む環状地帯、とりわけ山の手西郊の隣接町村(品川町、大崎町、渋谷町、千駄谷町、淀橋町、大久保村、高田村、戸塚村など、山手線に沿った地域)の人口は、小石川区や牛込区にやや遅れ、日露戦争前後から急増し、1903(明治36)年から1908(明治41)年までの増加率は約9割、続く5年間には約7割の増加率だったという。この膨張を促した一因として、市電の営業開始(1903年)、山の手線電化(1910年)とそれに伴う電車の都心への乗り入れなど、都市交通網の整備があげられる。
- 注4 当時の官庁の執務時間は3パターンあった。すなわち、9月11日から10月31日までと3月1日から7月10日までが8:00~16:00、11月1日~2月末までが9:00~17:00、そして夏季(7月11日~9月10日)が8:00~12:00である。
- 注5 日本銀行統計局「企業物価指数」によれば、明治末年の企業物価指数は現在の約1000倍になる。小六に遺された教育費1000円は、現在の約1000万円に相当する。借財を返しても4000円(現在の貨幣価値に換算すると4000万円)以上の金が残ったというところから考えると、宗助は裕福な家庭で育ったのであろう。
- 注6 朝日新聞社に入る前年の1906年、漱石は、米山の言葉を思い起こすかのように、自分は「100年計画」で100年後に読まれる作品を書くつもりという手紙を弟子等に記していた。
- 注7 典型的な中流住宅は、中廊下によって接客+生活部分と付帯部分を分けた間取りである。漱石の小説では、たとえば『三四郎』に登場する独身の高等学校教師広田が、主人公三四郎たちの手をかりて引越すことになる西片町の借家が該当する。ちなみにその家の間取りは、「玄関の代わりに西洋間が一つ突き出してるて、それと鉤の手に座敷がある。座敷の後ろが茶の間で、茶の間の向が勝手、下女部屋と順に並んでる。外に二階がある。但何畳かわからない」(『漱石全集』第5巻、367頁、岩波書店、367ページ)というように、部屋数は5つか6つで、建坪22~23坪であった。広田先生はこの家に年輩の下女と暮らしていた。
- 注8 「主婦室」は大正半ば以降の中流家庭の住宅設計図においてしばしば見られる。明治末期の小規模な中

流住宅では珍しかった。「居間」というのは専用の個室を意味する。作品中の「茶の間」が現在の家族が集う居間（リビング）に近い。

注9 『門』には、街頭で「経済を心得る人は、衛生に注意する人は、火の用心を好むものは瓦斯竈を使へ」という広告を見つけた宗助が描かれている。また、宗助が通院する歯科医院の待合室には「瓦斯暖炉（ガストーブ）」が設置されていた。

注10 アップライト型のピアノ価格は、当時300～600円であった。なお、漱石の1908（明治41）年6月21日の日記には、この日ピアノを400円で購入したとある。

注11 特に『三四郎』における「広田先生」の家は、漱石の間取りの描写どおりに図面に起こしても、住宅として破綻しない。

注12 『門』の最終章には、宗助の月給が5円増俸されるエピソードが出てくる。2割5分という原則に満たなかったということから、宗助の月給は20～30円であったと考えられる。

#### 【引用文献】

- 1) 南博編『大正文化（新装版）』勁草書房、187頁、2001
- 2) 加藤秀俊『文芸の社会学』PHP 研究所（PHP 文庫）、8頁、1989
- 3) 『漱石全集』第23巻、岩波書店、331頁、1996
- 4) 『漱石全集』第23巻、岩波書店、337頁、1996
- 5) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、598頁、1996
- 6) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、599頁、1996
- 7) 『漱石全集』第25巻、岩波書店、165頁、1996
- 8) 『漱石全集』第25巻、岩波書店、166頁、1996
- 9) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、371頁、1996
- 10) 前田愛「山の手の奥」、『都市空間の中の文学』（前田愛著作集5）、筑摩書房、1992
- 11) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、362頁、1996
- 12) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、166頁、1996
- 13) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、408頁、1996
- 14) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、408頁、1996
- 15) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、448頁、1996
- 16) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、449頁、1996
- 17) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、460-461頁、1996
- 18) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、363頁、1996
- 19) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、418頁、1996
- 20) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、507頁、1996
- 21) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、507頁、1996
- 22) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、451頁、1996
- 23) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、480頁、1996
- 24) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、488-489頁、1996
- 25) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、455頁、1996
- 26) 『漱石全集』第6巻、岩波書店、480頁、1996
- 27) 『明治大正国勢総覧（復刻版）』東洋経済新報社、1975

#### 【参考文献】

- 1) 森田草平『続 夏目漱石』甲鳥書林、1943
- 2) 石塚裕道『東京の社会経済史』紀伊國屋書店、1977

夏目漱石の小説『門』にみる明治末期の中流家庭

- 3) 多田道太郎『風俗学 路上の思考』筑摩書房, 1978
- 4) 週刊朝日編『続 値段の明治大正昭和風俗史』朝日新聞社, 1981
- 5) 荒正人『増補改訂 漱石研究年表』集英社, 1984
- 6) 井上忠司『「家庭」という風景：社会心理史ノート』日本放送出版協会, 1988
- 7) 小幡陽次郎『名作文学に見る「家」』朝日新聞社, 1992
- 8) 松岡陽子マックレイン『孫娘から見た漱石』新潮社, 1995
- 9) 石原千秋『漱石の記号学』講談社, 1999
- 10) 『漱石全集』第27巻, 岩波書店, 2000
- 11) 岡敏夫・山形和美・影山恒夫編『夏目漱石事典』勉誠出版, 2000
- 12) 下川耿史・家庭総合研究会『明治・大正家庭史年表』河出書房新社, 2000
- 13) 清水美知子『〈女中〉イメージの家庭文化史』世界思想社, 2004
- 14) 湯沢雍彦・中原順子・奥田都子・佐藤裕紀子『百年前の家庭生活』クレス出版, 2006
- 15) 渡邊澄子『男漱石が女を読む』世界思想社, 2013
- 16) 清水美知子「夏目漱石の小説にみる女中像—『吾輩は猫である』『坊っちゃん』を中心に—」『関西国際大学研究紀要』第15号, 2014

